

第3分科会（鳥取県）

主題：生き生きと自分を表現する力を育てるために

～日々の保育を見つめ直す記録のあり方～

指導助言者：大高 美穂子（鳥取県教育委員会事務局 小中学校課指導主事兼係長）

司会者：黒田 暁子（小さき花園幼稚園）

発表者：木原 なつみ（小さき花園幼稚園）

記録者：森本 さおり（小さき花園幼稚園）

原田 希依（小さき花園幼稚園）

1 発表の概要

（1）主題設定理由

本園の子どもたちは、明るく挨拶ができ、友達を思いやる優しい心の持ち主が多い。また、自分のことを自分の力でしようとする姿が見られ、友達や保育者と関わりながら穏やかに生活している。しかし、自分の思いを相手に伝えることが苦手であり、人前では力が発揮しにくいといった課題もある。そこで、本園のめざす子どもの姿を“生き生きと自分を表現する子ども”とし、全職員で研究を進めることにした。本研究は2年目であり、1年目を踏まえてさらに充実した研究となるよう話し合った。個々で表現する姿は少しずつ変わってきている子どもたちだが、言葉で思いを伝え合うことがやはり課題となることが明らかになった。そこで、今年には表現に加えて“伝える”ことに視点を置いて取り組むことにした。

幼児理解が保育の基盤であり、保育者は幼児を理解し、一人一人の行動や言葉の意味を考えながら思いに寄り添い、幼児の興味・関心を捉えて遊びへと繋げていくことが「遊びきる子ども」を育むことにつながる。また幼児は遊びを通してたくさんのことを発見・吸収し、成長していく。さまざまな経験や日々の積み重ねによって、充実感・達成感を味わいながら自信を持って、自分の思いを表現するようになる考えた。

研究にあたっては、幼児理解を深めるための方法として、日々の子どもの見取りを行うと共に、記録の充実に努めていきたい。継続的に幼児の姿を記録することで、成長の過程を見ると同時に、日々の保育を振り返り、次の保育に生かすことができる。子どもが主体的に遊びに関わり、自分の思いを発揮したり蓄えたりするための、保育者としての環境構成や援助のあり方を考えていきたい。

（2）取り組みについて

園の現状と課題の共通理解

研究にあたり、改めて本園の子どもたちの姿を見つめ、園の現状と課題、めざす子どもの姿を明らかにした。それぞれの考えを付箋に書き、模造紙の上で同じ内容ごとに分類してまとめていく、KJ法を用いた職員研修を行い、話し合いの内容によって付箋の色を変えて、分かりやすいように工夫した。

主題設定でもふれたように、本園の子どもたちは思いやりがあり優しい心の持ち主が多いが、自分の思いを伝えることが苦手という一面を持っている。

この園の現状と課題から、“表現”という視点でめざす子どもの姿を話し合い、表現の中にも、言葉での表現・製作で形にすることによる表現・歌やダンスなど音楽を通しての表現など色々な表現の中から特に言葉による表現ができるようになることを願い、“さまざまな経験を通して、自分の思いを言葉で伝える”ことをめざしていくという共通理解を深めた。

そして、生き生きと自分を表現する力を育てるために各学年で次のような取り組みを考え、環境づくりや保育実践を行った。

さらに2年目は、1年目の研究を踏まえ、再度共通理解を深め、現状と課題をもとに研究を進めていった。

記録の工夫・活用

今まで活用していた週日案を見直し、繋がりのある保育を展開するためにはどうしたらよいのかを考えながら、週日案の様式や活用方法を検討した。現在使用している本園の週日案は、1週間の見通しを持ちながら保育計画を立てた上で、ねらいについての評価や幼児の姿を振り返り、記録をするようにしている。また、表現を意識しながらも5領域がまんべんなく経験できる保育となるよう、それぞれの活動に合わせて重点視点を示すようにしている。

(3) 実践例

()平成26年度 4歳児

<学級の実態と教師の願い>

ひまわり組(男児7名、女児11名)とすみれ組(男児7名、女児11名)計36名の年中組。

初めてのクラス替えがあり新入児も加わって、新しい環境の中でスタートした4月。担任は2人とも持ち上がりだったため、安心感を持って過ごす子どもが多かった。しかし、中には新しいクラスに戸惑いを感じる幼児、初めての園生活に不安を抱く新入児の姿も見られた。そこで、クラスの枠にとらわれず集団遊びを取り入れることで、いろいろな友達と関わる機会を作り、クラスの雰囲気馴染めるよう考えた。友達との関わりの中で、自分の思いを出せるように、友達と一緒に充実感や達成感を味わい、自己の表現へと繋がっていけるようにという思いを持って、「集団遊びを通して、自己表現できるようになる」をねらいとして取り組んだ。また、1年間さまざまな製作を通して自分なりのアイデアをもち、思いを形として表現することにも力をいれた。

~ 4歳児の取り組み ~

<1学期:みんなで駅を作ろう>

・自分のイメージする“駅”を作り、それぞれの思いを形として表現することができた。

<2学期:秋のお話作り>

・実際に見たり、触れたりして秋を感じながら過ごしたことで、経験の中から子どもたちが色々な思いを膨らませ、アイデアを出し合いながらお話作りができた。

<3学期:表現遊び>

・題材決め、劇の道具作り、セリフや歌の歌詞・振り付けを考えるなど、子どもたちの手や思いが加わることで、劇に対する気持ちを高めていった。人前に立つのが恥ずかしかった子どもも、友達と一緒に役を演じる楽しさを感じながら、役をやりきっていた。

<がんばったねカード>

・段々とシールが増えていくことで自分の頑張りが目に見えて分かり、「もっと頑張ろう!」とやる気を持って取り組む姿がみられた。できなかったことが少しずつできるようになったり、得意なことをさらに伸ばしていったりすることで、自信へと繋がっていった。

<自由に製作>

・駅作りをはじめ色々な製作の中で、自分で考えて自由に形を作ることを経験してきた。製作が好きな子どもが多く、思いを膨らませながら形にしていく姿は生き生きとしていた。

<考察>

1学期の駅作りの活動では、イメージしたものを形にしながらも、見ただけでは何か分からない物もあったが、この1年を通して細かいところまでよく見てものの特徴を捉え、それを再現して作ることができるようになってきた。思いを形として表すことで満足感を味わい、喜びが自信となり、“誰かに見せたい!”と言葉で伝えようとする姿に繋がっていった。

人前に立ったり注目されると固まってしまう本来の姿が出せなかった子どもも、みんなの前で何かをしたり思

いを伝えたりと、少しずつ自分なりの自己表現ができるようになった。しかし、まだまだ言葉での表現が難しく課題となっている。また、“みんなと一緒に”より“自分の世界観”を楽しむ子どももいるので、友達の様子を見たり一緒に活動したりする中で、仲間と表現する楽しさを感じていけたらと思う。

()平成27年度 5歳児

<学級の実態と教師の願い>

ばら組(男児7名、女児11名)とさくら組(男児7名、女児11名)計36名の年長児。

春クラス替えがあり、担任も変わってのスタート。園で最年長となり、小さいクラスの友達のお世話係としての日々が始まった。一人一人が主人公として生活しており、自分の世界を楽しんでいる子どもが多い。しかし、その時期においては物足りなさを感じた。毎日が学びの場である生活の中で、いざこざや葛藤の体験を重ね、それについて友達や教師と考えたり話し合ったりしながら、仲間と共に共通の経験や感動を伝え合える経験をさせていく必要があると感じた。

<1学期:みんなでつくろう>

・友達と一緒に汽車遠足を思い出しながら作品作りができた。

観点(意欲・協力)

視点(表現 ~伝えたいな・聞きたいな)

【遊びの経過】

年中時からの夢であった汽車遠足がとうとう実現した。友達と遠足の経験を共に語り合いながら、みんなと一緒に思い出の作品を作るようになった。



【ねらい】

友達と一緒に
汽車遠足を思い出して
作品作りをする。

【評価】

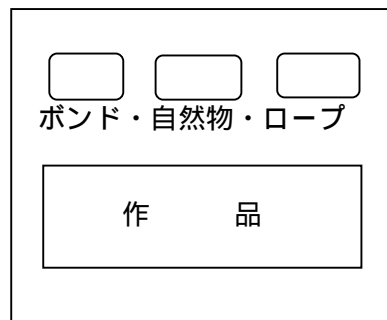
・色々な素材を使って作ることや見つけた山や川、線路などが徐々に形となっていくことを喜んでいる。

【 幼児の活動 環境の構成 保育者の援助 】

子どもたちの思い描く場面を少しでも作品として実現できるように素材や材料を吟味しながら準備しておき、使いやすくまた製作しやすいように配置する。

友達と相談したり会話をしながら進めていくグループでの活動場面と、個々の思いが十分発揮できる活動場面を作る。

遠足後も気持ちが持続するように、公園で拾ってきた自然物(木の実・木切れ等)を準備し、作品に使えるように配置する。



どんなものが作りたいか話し合う

<ダンボールに駅をはりつける子どもたち>

改めて汽車遠足をイメージできるように汽車の絵本を用意し子どもたちの発言や友達同士の会話が盛り上がるきっかけになるようにする。

積極的な子どもと消極的な子どもとの差が大きいため、話し合いが少しでもスムーズになるように保育者が仲立ちになりながら代弁したり励ましたりする。

様々な材料を使って、友達との会話を楽しみながら、みんなで手分けして作っていく

<自分たちの乗った車を走らせる子どもたち>

製作の過程において、育てたい姿（役割や順番を決めたり、物の貸し借りなど）ができるような場を設けていく。

一人一人の取り組みの違いはあっても、その子なりの頑張りを認めていく。

<駅と駅を線路でつなぐ子どもたち>

個々で作りたいもの・やってみたいことに挑戦する

<より本物に近づけていく子どもたち・汽車が走れるように工夫している子どもたち>

前はグループでの活動が多くなってしまったので、今回は個々での活動場面も増やし、それぞれが十分満足感が得られるようにする。

作品が徐々に完成していく様子を共に喜び、「まだやりたい!」という思いに寄り添い、十分な時間を提供する。

作品完成

できあが

他のクラスの友達に作品を披露し、遠足の思い出を語ったり、説明したりする

完成して終わりではなく、他学年の友達や職員にも見せることで、製作したことへの満足感が増すような体験にする。

後日、家族を招待して作品を披露する機会を設け、子どもたちの活動を保護者にも伝えていく。

<考察>

製作活動前半では、少し教師主体となってしまう場面が多かったと反省している。子どもたちへの信頼が足りなかったとその頃を思い返す。完成後、子どもたちの作った作品を年下の子どもたちに披露した。来年、汽車遠足に出かける年中組の子どもたちには、手を取って詳しく説明する姿があった。年中児も興味深そうに聞き入り、来年行くであろう汽車遠足への期待が膨らんでいる様子だった。作品を子どもたちの目線に合わせてホールのステージに貼り付け展示すると、年長児は、喜んで飛び跳ねたり、製作物に触れるなどして楽しかった思い出を再び思い起こしている様子だった。中には、自分の作った部分がお気に入りの場となり、度々作品のそばに立ち寄っては、居心地の良い空間であるかのようにそこから離れない子どももいた。

マイペースで個々の活動が多かった年長児。友達を感じながら何かに取り組んだり、友達と一緒に協力して何かをしたりするという姿が見たいと日々願っていたのだが、この製作を経験したのち、「あの時、みんなで頑張ったから、きっとこれもできるよ!」と話したり、“友達と会話をしながら相談したり、力を合わせたりする”ことも少しずつでき始めてきたように思う。

最後に今年長全体で取り組んだ製作物も、この研究のテーマである『日々の保育を見つめ直す記録』のひとつになる!ことを実感した。以前作った製作物を改めて見返すことは、作った時の子ども一人一人の育ちの段階や子どもたちの姿を思い起こし、成長したことを感じるとともに、その経験が今の育ちに繋がる証となっていると思った。

(4) 反省と考察

<年長>

- ・1つ1つの経験や行事が自信に繋がってきた。1つの活動を終えるたびに、次に繋がっていくような声かけを心がけた。互いに認め合い、保育者も言葉にして褒めたり認めたり、1つ1つを確認しながら過ごした。
- ・4月から比べると成長も見られるが、“自分から進んで”という面ではまだまだ頑張りが必要に感じられる。
- ・園の最年長としての意識がある子どももいるが、自分中心の世界の子どもも多いので、これからも声をかけていきたい。

<年中>

・新入児も加わり、年少の時に同じクラスだった仲間と活動をする姿がよく見られたが、それぞれの好きな遊びを通して少しずつクラスの友達との関わりが深まってきている。その反面、仲良しの友達同士で固まってしまい、他の友達となかなか関わることのできない子どももいる。今後は保育者が仲立ちとなってクラス全体で友達関係が深められるように援助したい。

・1学期は気持ちの良い挨拶ができるように取り組み、自分から進んで挨拶ができる子どもが増えてきている。

<年少>

・初めての集団生活の中、安心して園に通えるように朝迎えたり帰り見送るときに、一人一人に声をかけるよう心がけた。なかなか遊びに入ることのできない子どももいたが、気持ちに寄り添いながら関わっていった。自由遊びの中で自分の好きな遊びを選んで楽しむ場や時間を十分に作り、その中で何かになりきったり作ったりと、自分なりの表現を楽しむ姿が見られた。

・身近な材料や自然物にたくさん触れて、それぞれ違った感触を楽しんだ。自然に言葉にして出たり、こちらが問いかけたりしながら、一人一人感じたことを伝える場面ができた。

<もも組>

・「幼稚園って楽しい!」と思えることを一番大切に、毎朝登園時には一人一人の顔をしっかりと見て挨拶をし、幼稚園や先生に早く慣れて安心して過ごせるように心がけた。

・言葉がまだはっきりと出ない子どももいるので、子どもの思いを行動や表情から受け取り、代弁するようにした。また、友達との関わりが増えるにつれて、おもちゃの取り合いや友達を押してしまう場面があるので、お互いの気持ちを伝えて知らせるようにしている。

(5) 今後の課題

日々の保育を振り返り、保育者の願いと幼児の姿を照らし合わせながら、さらに子どもの見取りを深め、次へと生かせる記録のとり方の工夫をし、より繋がりのある保育や生き生きと自分を表現する幼児の育成を目指していきたい。

一人一人の子どもの思いを受け止めたり共感したりして、安心感や自信を持ちながら自己発揮できるよう、援助していきたい。

今後も職員間で情報を共有しながら、年齢に合わせた取り組みを考え実践していきたい。

2 研究討議

全体討議

事前にお知らせした日頃の保育の写真について、自己紹介の際に、写真のどんな所に惹かれたのか、なぜ選んだのかについて一言。

その後、用意した写真について討議を行う。

- ・写真の中の子どもは何と言っているのか。
- ・何を考えているのか。
- ・写真を見て感じたこと。
- ・手や足の向き、周りの環境にも目を向けて色々な角度からの視点。

上記についてグループ討議を行う。

討議の結果をいくつかのグループに発表をしてもらった。

3 指導助言（全体とまとめ）

「小さき花園幼稚園の取組に学ぶ」

（１）鳥取県の取組

鳥取県では、目指す幼児の姿を“遊びきる子ども”として取り組みを進めている。県を挙げて、遊びきる子どもを目指しているという状況である。小さき花園幼稚園の発表の中にもある、“遊びきる子ども”とは何か、というと、遊びたいという気持ちを持って、自ら遊びだす、そういう子どもを育てていきたい。そして、環境の構成や援助によって、十分遊び込む場面を大事にする。そうすることによって、「今日も楽しかった」「明日も遊ぼうね」というような気持ちになるように、そういう保育をしていこう。ということである。十分に遊び込むための環境の構成や、記録の充実が必要不可欠である。

（２）小さき花園幼稚園の取組から～記録の充実を図るために～

全職員の共通理解に基づく実践

具体的な取組は沢山あったが、子どもの実態を把握し、その姿から目指す子どもの姿を明らかにした。そして、各学年でどういう研究にしようかという共通理解をしていた。プレが無く、強い意思の下で行われており、職員が共通して向かうところが明らかになっていた。そして、一つ一つの取り組みが、PDCAサイクルに基づいたものであった。

カリキュラムマネジメントの適切な実施に向けた取組

PDCAの見直しが行われることによって、取り組みが進められていった。

（３）専門性を高めるための記録のあり方

文部科学省から出ている『指導と評価に生かす記録』という冊子をもとに話を進めていく。

教師に求められる専門性

幼稚園教員としての資質

幼児理解・総合的に指導する力

具体的に保育を構想する力

得意分野の育成、教員集団としての協働性

特別な配慮を要する幼児に対応する力

小学校や保育所との連携を推進する力

保護者及び地域社会との関係を構想する力

園長など管理職が発揮するリーダーシップ

人権に対する理解

記録の意義

幼児理解を深める

幼児理解をもとに次の保育を構想する

教師と幼児との関係を省察し、教師自身の幼児の見方を振り返る

グループ協議の中で、どこかのグループが、書くことによって、後で見られるということを言っていた。その場で思っても忘れてしまうということがあるので、後で振り返るための記録としてほしい。次の保育につなげていくということが必要である。

記録の様式と実際

名簿に書き込む記録

一定の枠組みを決めて書く記録

週日案に書き込む記録

学級全体の遊びを空間的に捉える記録

他にも、保護者懇談会の記録や日々の記録（個人ノート・付箋を使ったメモ等）を大切にしているという幼稚園もあるようである。

記録からの読み取りの実際

何を記録するのか、だけではなく“何を読み取るのか？”が大切。

一人の幼児としての育ちを読み取る

幼児の人間関係の育ちを捉える

教師の援助を振り返る

環境の意味を読み取る

学級の育ちを捉える

配慮の必要な幼児の理解と援助

グループ協議の中で写真を見て話し合った。背景などの情報が少ない中で読み取りを行うことは困難ではあるが、人によって見方が違うという点がとても重要である。

多様な見方、柔軟な見方、子どもの動きからの思いに寄り添った見方というものを身に付けていかなければならない。自分の思い込みで子どもを見ていないかどうかを常に見返す必要がある。

記録を指導や評価の実際に生かす

記録から指導の過程を評価する

教材研究に生かす

記録を指導計画の改善に生かす

記録を評価に生かす

記録を園内研修に生かす

保護者との連携に生かす

（４）今後の取組に向けて

カリキュラムマネジメントの普及

中央教育審議会の諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」より

各学校における教育課程の 編成（PLAN） 実施（DO） 評価（CHECK） 改善（ACTION）の一連のカリキュラムマネジメントの普及が必要であり、これらを適切に進めることは、幼稚園における質の高い教育内容を保護することに他ならないと言われている。

実践にあたっては、より具体的に指導計画を作成していくことが重要である。

幼稚園教育要領の理念の実現に向けた指導計画作成のポイント

・具体的なねらい及び内容の明確な設定

- ・適切な環境の構成等
- ・長期の指導計画と短期の指導計画
- ・指導計画と具体的な指導
- ・指導の過程についての反省と評価
- ・幼児理解を深める記録

教師の役割とは

子どもにとって「活動の理解者として」「共同作業者・共鳴する者として」「あこがれを形成するモデルとして」「遊びの援助者として」「心のよりどころとして」の存在であるべきである。

本日の研修を通して、「できることは何？できないことは？やりたいと思うことは？やりたいと思うのに、できないのはなぜ？どうしたらできる？」これらの気持ちを明日からの実践に活かしていただけたらと思っている。

“子どもの今に寄り添い子どもの未来を築く”ということで、『将来の人格形成の基礎を培う幼児期』というような言葉が幼稚園教育要領の中に入っているが、そこで先生方がとても大切な役割を果たしているということを、私自身も自戒しながら取り組んでいきたいと思っている。